
地域防災実戦ノウハウ（120・最終回）

—「釜石の奇跡」と真の「奇跡」—

Blog 防災・危機管理トレーニング
(<http://bousai-navi.air-nifty.com/training/>)

主 宰 日 野 宗 門

(消防大学校 客員教授)

東日本大震災時、大津波から逃れた岩手県釜石市の小中学生の避難行動に対し「釜石の奇跡」という言葉が使われ、それは「とき（時）の言葉」として多くの人の目や耳に触れました。しかし、この言葉に対しては「奇跡ではない」という意見も多くあります。

一方で、釜石市の避難事例の中には「奇跡」とも呼ばれるべきものが存在し、その「奇跡」は津波教育の根本の姿を教えるものです。筆者はそれに十分に焦点が当てられていないことを残念に感じています。本稿では、このような問題意識で「釜石の奇跡」を深掘りすることとしました。

1. マスコミにつくられた「釜石の奇跡」

東日本大震災前、岩手県釜石市北部の鶴住居（うのすまい）地区の低平地に鶴住居小学校と釜石東中学校がありました。東日本大震災の当日、大槌湾から侵入した巨大津波から逃れるため、学校にいた570人の児童・生徒たちは、1.6kmもの距離を避難しました。学校管理下での児童・生徒のこの規模・距離の水平避難は他に例がありません。

避難に際し中学生が小学生の手を引き必死で逃げる様子の映像が話題となり、マスコミやインターネットで「釜石の奇跡」として何度も取り上

げられ、「とき（時）の言葉」となりました。

しかし、避難した当事者はこの状況に大きな違和感を持っていました。

当時、釜石東中学校3年生で防災を担当する委員会の委員長をしていた菊池さんへの取材記事を以下に引用します。

『菊池さんが、自分たちの避難行動が「釜石の奇跡」と呼ばれていることを知ったのは、震災からしばらく経ってからだった。「正直あの頃、自分たちがどう報じられているのかに気付くゆとりはなかったんです」「ようやく自分たちの気持ちが落ち着いてきた頃には、話がすっかり大きくなってしまっていて、もう收拾がつかない状況で」震災から半年ほど過ぎると、「釜石の奇跡」を経験した子どもたちに話を聞きたいというメディアからの依頼が増え始めた。だが菊池さんには、拭うことのできない違和感があった。まず、どうして、そんなに話が大きくなっているのだろうと驚いた。そして、「自分たちだけの力で避難できたわけじゃないのに、という違和感がありました』^(※)

『震災の日、子どもたちの命を救おうと行動した人々は、たくさんいた。水門を閉めにいった消防団の人がいなかったら、小学生たちはきっと無事ではなかった。避難誘導してくれた住民の人たちもいた。教員も避難の指示を出してくれた。

「そうやって助けてくれた人たちがいっぱいいるのに、中学生が、自分たちで全部やったように伝えられていたことを、すごく申し訳なく感じていました。』^(※)

(※)「『釜石の奇跡』は奇跡じゃない。あの日、報じられた“美談”から私は逃れられなかった」(2021年3月9日、BuzzFeed JAPAN)

この記事からは、マスコミの報道と当事者の感覚や現場の実態との間に大きな乖離があったことが読み取れます。

2. 学校管理下での児童・生徒の死者0人は「奇跡」ではない

東日本大震災の津波により学校管理下で児童・生徒が死亡した小・中学校は、宮城県石巻市の大川小学校（犠牲となった児童：74人）と同県南三陸町の戸倉中学校（犠牲となった生徒：1人）の2校のみでした^(※)。犠牲者の多かった大川小学校のケースは世間の関心が高かったことをご記憶にあると思います。

(※)「教育機関の被災と防災管理のあり方」(中野晋ほか、土木学会論文集(安全問題)、Vol.68、2012)

この事実から1で紹介した釜石の事例を「奇跡」と呼ぶことに疑問を感じた人がいても不思議ではありません。

『釜石市に限らず、岩手県では、あの津波で学校の管理下にいた児童生徒は一人も犠牲者が出ていなかったことです。津波で校舎が全壊した25校を始めとして、県内の児童生徒は全員無事避難していたのです。

つまり、「釜石の奇跡」の「奇跡」の意味が、関連本の表紙にもなった『『犠牲者ゼロ』を生み出した』ことを指すのであれば、「奇跡」は釜石だけではなく、本県のすべての学校で起きていた

ことになるのです。先に紹介した4度も避難場所を変えた気仙中学校や、完成したばかりの橋を伝って二階から県道に避難させた越喜来小学校も全員無事でした。』^(※)

(※)「子どもたちは未来の設計者 東日本大震災「その後」の教訓」(鈴木利典、ぱるす出版、2021年6月、p.239)

なお、上記の内容とは無関係ですが、釜石市は2013年3月以降、「釜石の奇跡」との表現は使わず、「釜石の出来事」と言うようになりました。

そのような表現を使うこととした背景には、東日本大震災のときにほとんどの児童・生徒が助かったのは日ごろの防災教育や訓練の成果であり、「奇跡」と呼ぶべきものではないという認識が関係者にあるからだといわれています。また、ほとんどの子供が助かった中であって我が子(当日学校を休んでいた)を亡くされた遺族の心情に配慮したともいわれています。

3. 学校管理下外で起きた「奇跡」—釜石小学校の事例—

釜石港近くの中心街に住む子供たちが通う釜石小学校は、街や釜石湾を見下ろす標高約25mの場所にあります。3月11日は釜石小学校では短縮授業で、児童は午後1時に下校しました。地震発生時、全校児童184人(当時)のうち、学校にいたのは卒業式の準備をしていた6年生10人程度でした。

当時の校長先生のお話では「児童たちはばらばらだった。下校途中の子、友達の家や公園で遊んでいた子、自宅にいた子…。中には海に魚釣りに行っていた子もいた」とのことです。

そのような中、午後3時25分頃、高さ10メートル以上の津波が子供たちの家がある中心街を襲いました。しかし、子供たちは大人顔負けの的確な

判断で、全校生徒184人全員が一人も命を落とすことなく無事に避難したのです。

このときの釜石小学校の子供たちの避難の様子をいくつかご紹介しましょう。

小学1年生の男児は、地震発生時に自宅に1人でいましたが、学校で教えられていたとおり、家の戸締りをした後、避難所まで自力で避難しました。

小学5年生の男児は川の近くで遊んでいましたが、地震後、両親が商店街で営む美容院に向かおうとしました。そのとき、友達が「駄目だよ。高い所に逃げなくちゃ」といって引き留め、高台の公園へ逃げました。男児の母親は「もし帰ってきていたら、津波にのまれたと思う。友達に救われた」と感謝しています。家庭では「地震の時はそれぞれ逃げよう」と話していました。母親自身も子どもの無事を祈りながら、高台に避難したということです。

小学6年生の男児は、2年生の弟と2人で自宅にいました。既に自宅周辺は数十センチの水量になっていたため、高台へ歩いて避難するのは危険だと判断し、自宅の3階に上（あが）り難を逃れました。

このほかにも、「今回も津波は来ない」と避難をしぶる祖父母の手を引いて逃げた子供や体の不自由な児童を高学年の児童が背負って避難したケースもありました。

いかがでしょうか？ 皆さんのお子さんが遊びや釣りで海岸近くにいるときに地震が発生した場合、釜石小学校の子供たちのような行動を取れるでしょうか？

お子さんと書きましたが、あなたご自身はいかがでしょう？

当時の校長先生は「大人たちでも足がすくむ状況で、子供たちは学んだことを忠実に実践してく

れた。しかも全員がそうしてくれたとは、奇跡としかいいようがない」といっています。

筆者も、ほとんどの児童が学校管理下外にあった釜石小学校で起きたことこそが真の「奇跡」だと思います。そして、その「奇跡」は日頃の防災教育・訓練の賜（たまもの）として発現したと考えています。

東日本大震災発生当時、釜石小学校の子供たちのレベルで津波の知識と避難能力を身につけていた子供は全国的にも極めて少なかったでしょう。

子供たちは成長とともに、親や学校の保護が及ばない時間や場所で行動することが多くなります。もし、そのときに子供に危険な状況が迫ったなら、彼らの頭と力で自らの命を守る行動を取ることが求められます。

私たち大人は、義務教育などの機会を生かして、彼らにその力を身につけさせる必要があります。また、私たち自身が率先して学び、能力を身につけ、彼らのお手本となることも大切と考えます。

4. 連載を終了するにあたって

阪神・淡路大震災の前年の1994年から開始した本連載は、自治体の防災担当職員の立場に立った実戦的な内容をお届けすることを目指しました。連載開始当初はここまでの長期連載になるとは想像していませんでした。しかし、毎年のように態様を変えて発生する災害やそれへの対策の進化などを追っていると、書かなければいけないことが次々と湧き上がってきたのも事実でした。ただ、連載開始から30年は節目だとも思っております。振り返ったとき、果たして皆様のご期待に沿えたものになったか自信はありませんが、今号をもって本連載は終了させていただきます。

皆様のご活躍を祈っております。